

### 特別座談会 「電子書籍」の未来：「国際文化情報学」の見地から

大中, 一彌 / 鈴木, 晶 / 島田, 雅彦 / 重定, 如彦

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication: ibunka

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

6

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2011-04-01

〈特別座談会〉

# 「電子書籍」の未来

——「国際文化情報学」の見地から

大中一彌（おおなか・かずや 国際文化学部准教授）

重定如彦（しげさだ・ゆきひこ 国際文化学部教授）

島田雅彦（しまだ・まさひこ 国際文化学部教授）

鈴木 晶（すずき・しょう 国際文化学部教授）

---

**鈴木** 本日はわれわれ国際文化学部の「国際文化情報学」の立場から、電子書籍について議論していきたいと思います。島田雅彦先生や私はこれまで数多くの書籍を出版してきたので、書き手の側から意見を述べたいと思いますし、大中先生には文化論、文明論の立場から、また重定先生には情報学の立場からいろいろお話を伺いたいと思います。

**大中** まず電子書籍といったときにどのような定義から入ったらいいんでしょう？

**鈴木** 書籍を定義するなら、「紙の上にインクでものを書いて、それを綴じたもの」ということになるでしょうか。電子書籍の場合はどうでしょう。まず、テキストがふつうの書籍と違って電子テキストであるということがありま

す。既存のテキストの電子化はかなり早くから行われており、一番有名なプロジェクト・ゲーテンベルクは1971年に始まっています。日本でも青空文庫が90年代の終わりから始まっています。これらは、それまで活字だったものを電子化しようという流れです。

それに対して、今、電子書籍として話題になっているのは、販売されるスタイルですね。つまり1冊の本の代わりにひとつの電子的パケットとして販売される。それで電子書籍元年といわれているわけです。

今年、村上龍が電子書籍の会社を設立しました。最近、ウェブマガジンの『JMM』に会社設立の弁を載せていましたが、そこで、どうして自分がやったかということ、まだ出版社にはそういう体制ができていないからだ、と書いています。これはよくいわれることですね。日本の場合は出版社の電子書籍への取り組みがすごく遅かったのです。これは島田先生が一番現場で身近に経験したり、見聞きしたりしていると思うのですが、実際のところはどうなんでしょうか？

**島田** 電子書籍の試みは、1990年代から端末の試作品を作り、私もモニターユーズしたことがあります。文字情報に限った読書端末作りは技術的に全然難しいことではなかったんですけども、日本では全く広がりがありませんでした。

**鈴木** ナショナルのΣブックとSONYのLIBRIéが日本での二大試作品でした。両方とも2000年代に売り出されたのですが、今からほんの2、3年前に製造終了しました。つまり全然売れなくて止めた（笑）。

書く側は、今や手書きから完全にワープロに変わりました。今では最初から電子的に入力してるわけですね。

島田 PCで執筆する現場においては、電子テキストを作っているようなものですね。ただ出版の慣例でそれを編集者が受け取り、版を組んで印刷所に回して、実際に版を作って、その上でゲラを出して、やり取りを重ねていくうちに電子テキスト化されたテキストの権利を印刷所と出版社が主張したいみたいな雰囲気になってきたわけです。でも著作権法上ではそういうのは発生しなくて、すべてのテキストの著作権は著者にあるんです。その中で出版社とか印刷会社のような企業がその権利をどのように主張していくのかという問題はずっとあったわけです。

村上龍の新しい会社の立ち上げは私も注目していて、講談社の『群像』という文芸誌に連載された小説を従来通りの紙の本と電子テキストを同時に出版しました。彼



鈴木晶先生

が新会社でパートナーシップを組んだのがデジタル系の会社だったわけですね。共同でiPad用アプリの開発、さらには紙の本では難しかったリッチコンテンツの開発を目的とした会社だったわけです。私としては村上龍、個人のレーベルを立ち上げたというような印象で受け止めています。

出版社は印刷流ってことを担ってきたんだけど、今後その仕事なくなるのでリッチコンテンツ開発の知恵を出す制作集団になるか、作家の著作権を総合的に管理するエージェント的な役割、要するに翻訳を通じて海外でも出版がしやすくなるってこともあるし、リッチコンテンツを作った後、それを映像展開とか二次使用にもっていくときにやりやすくなるので、その部分のエージェント的機能を担いたいんだろうなと思います。あと一番人々の関心をよんでいるのは取り分の問題だと思うんですね。

鈴木 今までは10%ですね？

島田 電子書籍の場合、紙の本よりも生産コストが非常に低く抑えられるわけです。これまでかかってきた印刷代、紙代、在庫を保存する倉庫代、書店に回す運送代、書店の売り場のレンタル代みたいなものすごいコストが1冊の本に乗っかってきていた。しかし電子書籍ではそれが全部なくなるので単価がすごく安くなる。そのときにプロバイダーと出版社と作家などがどういう収益の分配にするのかってということに関しては、いろんなビジネスモデルが錯綜していて、もちろん大手が中心になって世界をエンクロージャーしていくような大会社、それこそ

Amazon や Apple のような、そういうところだったら一気に進むかもしれない。しかし日本のように相変わらず既得権益をどう守っていくかということに戦々恐々としているような人たちの間の合意では、なかなか誰もが納得いくビジネススキームを作れないでいる状態だと思います。

**鈴木** 今、音楽の世界ではCDがなくなりつつあり、かたちのないデータをダウンロードするスタイルに移行しつつありますが、書籍は昔のLPレコードのように、マニアがコレクションするようなかたちで残るのではないかともいわれていますね。

**大中** 僕も音楽との比較っていうのは思っていて、ただそうなってくると単価が下がる可能性はあるわけですよ。実際にコストがあまりかからなくなってくる話があ



大中一彌先生

り、値下げしろという圧力がはたらくかもしれません。音楽で議論になっているのは、果たしてプロの商売としてサステナブルなのかということですよ。要するに誰もが発信できるようになり、データでダウンロードするのであれば、限りなくゼロに近いことになりかねないわけですよ。例えば文学ということで考えれば、芸術の生産にはそれなりにお金が必要なわけで、出版社にいわせれば我々がそこを支えてきたんだという自負もあるでしょう。そういう部分が今後どうなっていくのかなとは思いますね。

**重定** 私が子どものころによくいわれていたのが、今後デジタル化の波がどんどんやってきて、会社の書類とかが電子化され、完全にペーパーレスな時代になるということでした。しかしある調査によると、紙が減るどころか増えてるって話なんですよ。私も論文に関しては、まさに電子書籍ですけども学会のページのデジタルライブラリーにPDFがありまして、会員になったら取ってこられるので利用しています。でも電子書籍は確かに便利になってきていますが、紙と比べてまだかゆいところに手が届かないので結局印刷して読むわけですよ。あと、ウェブのアンケート調査によると、電子書籍で読まれているのは漫画のように気軽に読めるものが多いようです。漫画やライトノベルは電子書籍に向いているけれど、じっくり読むものは結局紙にしちゃうんじゃないか、そこが分かれ目なのかなと思います。

**鈴木** 電子ブックリーダーの普及が日本ですごく遅れたのは、一つにはケータイがあったせいだと考えられます。実際、

ケータイで漫画を読むのが普通になっている。また、ケータイ小説というジャンルも生まれました。ただし、ケータイ小説として売れると、最終的には書籍になって、それでベストセラーになったりしたわけで、たんにケータイだけでは終わらなかったわけですけどね。軽い読みものは端末リーダーとかケータイで読み、重い文章は紙で読むことになるのではないかと、ともいわれています。この間も誰かがコラムで、埴谷雄高は紙でなくちゃ俺は読まないと書いてあったんだけど、でもやっぱり感性というのは変化していくものだから、将来のことはわからないのではないかと。今はすごく過渡的な感性なんじゃないかと思うんです。

**島田** 過渡的ということでは、一番簡単な電子書籍の作り方ってというのは紙の本を破いて、それをPDFに取り込んで、そうやってできたデータを楽天とかで売ったら全部自分の取り分になるものなんですよ。

**鈴木** それを「自炊」っていうんです。

**大中** 違法行為ですよ（笑）

**島田** 自分の著作だったら全然問題ない。

**重定** 授業で使う教科書とか自分で書いたものなら、コピーして配っていいのかなってちょっと疑問に思ったりするんですけど。

**島田** 強いていえば、それについて使用料払ったとしても結局





重定如彦先生

自分のところに戻ってくる。作家と出版社の間では、出版社は結局自分たちの権利として主張できないものだから、一度著作権料として払ったものの中から手数料として貰うシステムにしようとしているんです。こういうふうに電子化といいながらマニファクチャー的な手作業が入り込む余地があるところが面白い。

今までは流通から配本から管理から小売りまで1人でできるはずがなかったんで、あらゆる業種の人たちとの分業で作ってきたんだけど、それも1人でできるわけですよ。あと他と分業でやる場合には、ワールドワイドなマーケットをもっているとか、素晴らしい広告ネットワークがあるとか、そのぐらいのメリットしかないわけですよ。だけど業界全体が潤う共存共生っていう方向でものを考えなきゃいけないのならば、そこで妥協できる点を探るのが現実的だとは思っています。しかしこれまで紙の本の時代の印税率がだいたい10%だったけれども、長年、搾取されてきたという意識をもっています。



島田雅彦先生

鈴木 いつごろから10%になったのかね。

重定 昔は違ったんですか？

島田 ただ書籍の値段と全体の物価指数における書籍の位置っていうのもあって、例えば40年くらい前だと1冊エッセイ集を出して、それが2万部売れたとすると家が建ったんですね。もちろん土地代や大工さんとかに払う代金が安かったというのがあります。そして相対的に原稿料は昔の方が高かった。卵の値段と原稿料は変わらないっていわれているぐらいだし、そうなってくると今では原稿料生活とか印税生活って非常に困難になってきました。ただでさえ価格が下がった電子書籍の印税率が、今いわれているようなプロバイダーが5割取って、残りの5割を大日本印刷や出版社と分け合い、著者の印税は

15%で我慢しなさいというような一方的な申し出に積極的にイエスというわけにはいかないでしょう。実質、もっと搾取されることになるから。

**大中** 要するに流通ですよ。大日本印刷もそうですけど、その下には流通の会社がぶら下がっているということだと思えるので、あと大きな書店ですね。今はそういうかたちで、それが今後どうなるかっていうのはあると思います。

**鈴木** 日本とアメリカの最大の違いは Amazon という書店が電子書籍を始めたことです。電子書籍を始めたのが出版社じゃないわけですよ。日本は今や書店が崩壊しかかっている。積極的に電子書籍に取り組もうという書店出てこなかった。出版社もやらないし、小売書店も電子書籍を売ろうってところがなかったわけです。

仮に島田さんが電子書籍を出すときには、やっぱりどこかで売らなくちゃいけない。そうすると村上龍みたいに大手のところ、例えばアップルで売るわけですかね。電子書籍の場合、小売書店というのはいりえないですからね。

**島田** あるとしたらカフェみたいな書店に行って、メモリースティックを差し込んで買うような形態でしょうね。

**大中** あと書店のその場で印刷するというのがありますね。要するに絶版のものを本という形態で手に入りやすくする使い方はあると思いますけど。

**島田** 電子書籍で読むか、紙の本で読むのかという使い分けの

話が出たときに大量のパルプ消費が森林伐採による環境破壊につながるので、読み流すタイプのものに関しては電子書籍でやっていくことになるでしょうが、「電子向き」というのは「忘れてもいいもの」っていう定義ができるんじゃないか。

また保存性の問題を考えるとグーテンベルクの聖書の初版本というのは1455年に出ていて、僕は実際に触ったことがあるんですけど、素晴らしく保存状態がよくて、もう200年くらい保ちそうな感じですよ。

**鈴木** 光ディスクができたときに、光のデータは100年もつといわれていたんだけど、最近ではCDの寿命はせいぜい20年じゃないかといわれていますね。

**重定** あともう一つ問題なのがフォーマットで、デジタル化すると機械やソフトがなければ読めなくなってしまうという点です。その点、紙などのアナログはそのまま目で見ればいいだけなのでいつの時代でも見られます。

**鈴木** グーテンベルクから始まった活字印刷はすでに500年生き延びてきたことが証明されてるわけです。デジタルのデータは、もちろんまだそんなに時間が経ってないから、証明はされてないんだけど、たぶん駄目だろうね。

**重定** 大きな企業でもコンピューターの世界って栄枯盛衰が激しいですからね。例えば十数年前だったら、表計算ソフトといたらLotus 1-2-3でしたが、あのソフトはベストセラーソフトで、一時期はこの世の春みたいな会社でしたが吸収合併されちゃって今は影も形もありません。

表計算ソフトの授業で学生に Lotus1-2-3 を知ってるかどうかを聞いたら誰 1 人知らないのが現状です。Google だってもしかしたら 10 年後にはないかもしれないですよ。もしそうなったときに Google が作ったデータフォーマットを誰が引き継いでいくのかといえば、それはわからないですよ。そこらへんやっぱりデジタルデータっていうのは難しいところがありますよね。

**鈴木** プロジェクト・ゲーテンベルクっていうのは全部 ASCII だけでやっている。それは英語だからできるわけで、日本語だとそんなことはできない。

**重定** 単純に文字だけを保存するのなら文字コードを決めて保存すればいいんですけど、文字の大きさや形などのレイアウトまで含めて保存しようとするとなかなか難しい問題です。そうするとそのフォーマット情報をどうするかっていうのは、文字コードだけの問題じゃなくなってきます。

**鈴木** 哲学的に考えるとなかなか難しい問題ですね。文学作品を書くとき、その文学作品はいったいどこに存在しているか、というのはなかなか難しい問題です。本っていうのは活版印刷が始まってから複製芸術になったから、1 万部といったら同一の作品が本という物質的なかたちで 1 万存在するわけだけでも、では「作品」はどこにあるのかっていうのは難しい問題です。それがデジタル化に際して浮上してきたように思うんです。

**島田** 例えば全国各地に文学館ってあるんだけど、そこが収蔵

する資料として生原稿であるわけです。かつて手書きだったんで、原稿用紙に万年筆とかで書いた自筆原稿を保存しておくような倉庫になっているわけです。しかし、こちらはもう完全にキーボードで打ち込んでいるわけですから、生原稿なんてないわけですよ。

**鈴木** コンピューターが導入される前は、原稿をなくしちゃったり、オリジナルのデータが消滅してしまった。また印刷してしまった後は、版組した版を紙型でとっておいたものがオリジナルだった。まさにアナログの最たるものですが。そこにはデータという概念がないわけですよ。すべてマニュアルでしたから、原稿を読んで版に組んで、印刷したものがオリジナルとして存在していたわけですよ。

**島田** データの保存には写すしかないわけだね。そういうような保管作業というのは随時並行して進むような気がします。

もう一つ記憶に残りやすさ、忘れっぽさということですね。例えば教育に電子書籍の応用をとというのがありますよね。各生徒に1台ずつiPadを配って電子書籍にしちゃうみたいな。こういうのはやっぱり記憶すべきものは記憶するっていう教育の基本に反しちゃってるわけじゃないですか、忘れっぽいこのメディアを使うってことは。

**大中** 大学の授業でも大人数の講義になるとYouTubeのような映像を見せると、寝ていたのが起きるわけですよ(笑)。学び方自体が変わってきているわけで、まさに紙ベース

で暗記させるところから映像素材を使って、最初に感性に訴えるという。それも良いところと悪いところ両方あると思うんですけども。

鈴木 読むことと書くことは関係してますよね。今の若い人は実際に字を書く機会が昔の人に比べてずっと減っていて、キーボードを打つ、あるいはケータイを打つ方が増えているわけですよ。昔はそれがなかったので、全部手で書いていたわけですよ。私は去年海外に留学していたのですが、著作権管理がますますうるさくなってきたため、アメリカやフランスの図書館でも必要な文献のコピーがなかなか許されず、仕方なく研究者は全部手でせっせと写していた。コピーもできないし、写真撮影も禁止されているけれど、写すのならよいのです。手で書いたものはちゃんとモノとして残る。

そういえば、電子書籍というのは、いったんデータを買ったらCDみたいにコピーして、無料で配れるんじゃないかって思われているかもしれませんが、あれにはコピーガードが付いていて、しかもいわば紐付きというか、管理されている。有名なケースですが、Amazonでジョージ・オーウェルの『1984』を売っていたけれども、法律が変わってジョージ・オーウェルの著作権が復活し、ある日突然、買った読者のKindleから『1984』がパッと消えたんだって。つまり回収ができるんですよ。ある日突然に出版停止ってことになると、手元から全部消えていく。ネットと繋がっていないと読めないとか、別のパソコンに移すと読めないというようなガードが入っている。つまり、購入した後でも管理されてるんだよね。

島田 それって 30 日間無料ソフトとかと同じ原理なの？

大中 常に認証しないと読めないんでしょうね。

重定 ネットに繋がないと読めないですよ。

鈴木 ネットと切断された状況だと、何も読めないってことも考えられるよね。やっぱり本は偉い（笑）。

私の場合、物理的な問題を解決してくれるのではないかという期待があります。つまり、とにかく家中に溢れている本をどうにかしたい。本の置き場ってみんな困ってるんじゃないでしょうか。

大中 先ほど家計の中に占める図書費の割合みたいなものがあって、統計局のデータを見たら 2 人以上世帯で、平成 22 年 9 月で、消費指数というのが、月 20 万 2538 円が平均らしいんです。そのうちの書籍費という項目がありまして、印刷物に関しては月に 1089 円。

島田 そのデータは単行本で小説を上下 2 巻は出せないってことですよ。要するに価格も 1500 円以下の単行本しか出せないっていう。

大中 食費だとエンゲル係数ってあるでしょ。あれも社会全体が豊かだとかどうかっていろいろあるわけじゃないですか、これもあると思うんですね。昔は多分もっと書籍費を使っていたと思います。今は売れるようなものがどんどん買われていくので、文学賞のあり方とかを見ても、日本に限らずかつてだったらそういうカテゴリーに



入れてもらえなかったものも、入ってくるわけですよ。やっぱりそこを考えなきゃいけない、つまり売れるものということを考えなきゃいけない。

**島田** 例えば30年前、大抵の作家だったら30年ぐらい書き続けていたような人は全集とかを出してくれていたわけですよ。でも今は時代的に紙の本で全集っていうのはありえないね。それでいくと電子書籍の場合だったら、昔の本をそれぞれPDFデータ化するだけで全集の体裁はできるわけです。その状態でとりあえず読める状態にはもっていけます。青空文庫もそれをやっていた。必要なときに紙に印刷するっていうサービスが定着した場合に、紙のものは常に電子データをベースにするんだけど、そこでまた付加価値とかを付ける方法で進化していくのではないかと。紙の本の進化の可能性も同時に開かれる感じがします。つまり紙の本を作るときになるべくコストをかけないでやっていたものを、よりコストをかける方向で、いうなれば美術品志向での進化っていうのもありうると思うんですよ。

**大中** 要するに大量生産方式でやるから、逆に売れないっていうのが問題になるわけで、せっかくテクノロジーがあるわけですから多品種少量生産みたいなものがあるのもいいと思うんです。それは100部も出ないかもしれないけど、でも作ろうと思えば作れるなら多少高くても、図書館には入ることがあるかもしれない。

**鈴木** その際、必ずついてまわるのは、出版文化は言語の枠をなかなか超えられないということです。結局日本では日

本語の本しか作れないし、読者もほとんど日本語の本しか読まない。その点では、アメリカと同じように考えても駄目なんです。Amazonは世界を相手に商売している。英語の本っていうのは世界中で売れるわけですからね。でも日本語の本は内需しかないわけですよ。

**島田** 一方で結局翻訳という作業だけをクリアすれば、あとはいちいち各国の出版社に頼んで出してもらいたいな作業は省けるわけですよ。英語版だったら日本語で出すと同時に英語のテキストだけを作っておけば、多少の有名人だったり、もしくは間に出版社やエージェン트가入っていればすぐに出せるわけですよ。

**鈴木** 翻訳者からの立場からすると、翻訳が一番大変だよ。

**島田** そこは自動的っていうふうにはいかないよね。特に文学作品なんかの場合には。あとやっぱりアルファベットの文化圏と日本語のような条件付きの象形文字文化圏では電子出版の広がり方が違いますね。日本の場合は漫画が主流って部分があるけれども、なぜ漫画なのかって考えてみてもいい問題だと思うんです。漫画は紙の本で進化してきたジャンルだけれど、印刷技術の中で一番プリミティブなもので表現できる。基本陰影だけ、あるいはハーフトーンがあったとしてもそれはどんな低レベルの印刷技術であっても再現可能だっていうところにポイントがある。それ故にこれだけ流通してきたし、どんなに劣悪な環境でも浸透してきた。

**鈴木** ケータイの画面と漫画のコマがちょうど合っていると

で、ケータイでマンガを読むという習慣が浸透した。

島田 あと液晶っていうのはエロ漫画を読むときに素晴らしい。要するに隣で斜めの角度から見えないでしょ？パブリックなスペースであっても携帯を通じてエロ漫画に没頭できるんですよね。またエロ漫画やアダルトビデオに関していうと、それらはメイドインジャパンのコンテンツの中でもものすごく稼ぎがいい。それに比べたら村上春樹なんて数じゃないわけですよ、あと北野武の映画なんかも。だけどやっぱりファインカルチャーとサブカルチャーがあって、その差別というものは厳然としてある。SONYのような有名企業はそういうエロコンテンツは表に出さないですよ。だからやっぱりそこで一つの境界線を引いているわけだけでも、現実にはウェブ上では同人誌などを通じて、メジャー企業の端末とかを一切経由せずにアンダーグラウンドでものすごい流通量を誇っているわけですよ。

大中 出版社で漫画をやっているところは、漫画で finans していわゆるハイカルチャーのものを出すっていうモデルもあったと思うんですね。少なくとも出版社はそういうことをするのが好きだと思うんです。その部分がある種の公共性を支えてきたみたいな、テレビ局と同じで、ある意味既得権益とかエスタブリッシュメントらがそういうことをいってるわけで、そこがもし中抜けで著者が印税率9割みたいな世界になったときは、ある意味防波堤がないわけですよ。かつて出版社がやってきたことがなくなって、著者の取り分が上がる代わりに直接リスクに晒されるっていう部分もあるのではないか

と思うんですが。

**島田** 村上龍の話に戻ると彼らは会社を立ち上げて利益配分も作家に有利なビジネスモデルを早い時期に提案したことに対しては非常に大きな功績はあるものの、しかしそのパイオニアであることが吉と出るか凶と出るかはまだわからないんです。つまり出版社を跨いで、ダイレクトにアプリを作って提供していく方法をとったとき、エージェント的な機能を出版社が今後ちゃんと果たすようになった場合、そこに入っていないとなると不利になるかもしれない。

**鈴木** 音楽の場合、そういう時代があった。メジャーから外れた独立レーベル系というのがいっぱい出てきた。そういう、自分たちで出すっていうのを1回経験してるわけです。出版の場合にはなかったですよ。大出版社か自費出版か、それしか選択の余地がなかったわけです。今、新しいあり方が出てきたわけだよ。問題は今の売れ方って、売れるか売れないかどっちかじゃないですか。売れるものだけ売れるっていうか、ベストセラーだけが売れ続ける。それってどこに推進力があるのか。その役目を出版社が果たしているとなると、個人レーベルはなかなか厳しいよね。

**重定** ロングテイルっていう、商品の売れ行きのグラフを恐竜に例えるという考え方があって、これまではその恐竜の首のところに対応する売れ筋の商品だけを前面に押し出すという考え方でやっていたのが、Amazonなどで恐竜の長いしっぽに対応するあまり売れない部分も掘り起

こすために「この商品を買った人はこんな商品も買っています」みたいなことをしているって話がありますが、実際の影響力というのはどのくらいあるのでしょうか？

**大中** そもそもロングテールの期間を待てないといけないわけですね。Amazonの場合は規模が大きいので、そういうやり方ができる部分もあって、今までは出版社がリスクを担うわけですよ。ある著者を発掘してきて、その人の本を出すというのはリスクを取っているわけで、売れば儲かるし、駄目なら駄目っていう。作家さん自身がそれをやれる部分もあるわけですが、ある意味プロテクションというものがなくなるのが一つと、じゃあAmazonみたいな大きいところではロングテール話が出てくるわけですけども、長い間決まったものが一定数ずっと売れているのだからあるだろうと、それは資本規模の問題があるし、ある程度時間の横軸が必要だと思うので。ある意味、怒濤のようにある作品を一生懸命プロモーションして売ろうとするのも、日本のメディア企業があまり大きくないからというか。

**重定** Kindleなどで電子書籍を立ち読みができるサービスがあるみたいです。本屋だと今は売れない本は置かないっていうのが基本ですよ。発売されたら1週間くらいは置いて、売れなかったら2度と置かないっていう。でもそれが電子書籍だとなくなって全部見られるようになれば、下の方も発掘できるようになる。

**島田** 紙の本の場合は大量に刷らなきゃいけないし、ブツを生産しなくちゃいけないっていう制約がありました。です

からそこでちゃんと売れるものを生産することでリスク  
マネジメントの部分が大きかったんだけど、電子  
書籍だと考えなくていいから純粹博打でいけますよね。  
要するにどんなものだって事故で売れてしまう可能性は  
あるので、それに賭けることができる。

**鈴木** 本というのは一つのステータスだった。作家志望の人は  
自分の作品が活字になる、つまり本を出すことが夢だっ  
たわけね。電子書籍だと、誰でも出せる。となると今ま  
でのステータスがなくなるので、選ぶ側も非常に難しく  
なる。Appleの場合はスクリーニングをやっている。自  
分のところでこれは売る、売らないっていうのをね。今  
まで出版社がやってたことを今度は書店の方がやるって  
いう可能性があると思うんだけどね。

**島田** 紙の本屋でも本屋大賞みたいなものがある、あれも基  
本的には売れるものをより売るっていう戦略なんです。  
ある程度スクリーニングに書店員が関与してきているの  
はあるんだけど。あとは単純に文字情報だけじゃなく  
て付加価値でどれだけ客寄せできるのかということだ  
しょう。

**大中** それこそベンヤミンとか複製技術の話でどんどんアウラ  
がなくなっていくと、テクノロジーもなくなってくるっ  
ていう話なんですけど、今おっしゃった付加価値って  
いうのは差異をどうやって出していかということだと思  
うんです。

**重定** あと、デジタルデータの宿命ですけど、何らかのかたち

で一生懸命プロテクトかけてますが、いったんコピーや破られたらどうしようもないという問題があります。タイトルを1文字だけ変えて中身はほとんど同じとか、勝手に字幕が付けられて売られちゃうとか、そういう話が著作権の意識の薄い国では横行していると聞いています。

鈴木 ものの概念が変わりますね。今の出版社では、在庫というのは全部商品ですから財産と見なされ、税金がかかっている。膨大な税金がかかるので出版社は長期間在庫を抱えたくなくて、よく断裁しちゃう。それがなくなると国の税収入もだいぶなくなるのかな。でも出版なんて小規模ですからね。

大中 そこに課税するんじゃないですか？

鈴木 電子書籍の消費税みたいなものができて、1冊売れると、1割ぐらい税金を取られるみたいな。

島田 でも一律にするよりはベストセラーから取れば良いと思うね（笑）

印税だってそうなんですよ。最初の5千部までは6%とかで、1万部超えてからは8%とかそういうような累進もあるんだから。売れたらそれはハッピーなことなんだから税金払えっていう。

鈴木 そのうち自費出版みたいな、自分で電子書籍を作って自分で売る人が必ず出てくるんじゃないかな。

島田 今、一番プリミティブなのは、まさにそのPDFで作っ

たのを対面販売する。そういうのがもともと同人誌じゃないですか。そのようなレベルの世界では Amazon や SONY などを經由せずに、自分たちのホームページを通じて世界配信したり……。

鈴木 しかし微々たるものだよな？

島田 漫画は馬鹿にならないものなんですよ。同人誌を通じて流通するのはエロ系のコミックスですけども、100万部売れるものだってあるわけですから。

大中 フランスだって出版社はガリマールとかみんな駄目ですけど、漫画系のところは業績が上がってて、それを考えると世界的に見込みがあるのではないかと思いますね。

島田 だから小説家なんかの場合だったら、そのまま文字情報だけ売ったって大して売れないと思っているわけですよ。コミック化した方が売れるっていう。

重定 日本でも『蟹工船』とかさっそく漫画になってましたよね。いわゆる文豪という人たちの本が軒並み漫画になっているような時代ですからね。

島田 そういう二次使用に向けて開かれている部分っていうのは確かにあると思うんですよ。これも広くはリッチコンテンツ化という枠組みの議論になるんだけども、音声データも画像データも比較的容易くアタッチできるわけですから。



鈴木 純粹な言語芸術が複合芸術化する可能性はありますよね、リッチコンテンツというかたちで。

島田 その部分のニーズが増えれば、今までになかった商売になりますよね。自分たちで仕事を取ってきて、工房的に展開していくということをする、わりと表現系の仕事の幅が広がる。産業転換まで大げさではないけれども、一つの新しいマーケットが切り開かれていくときに、一番最初に考えなければいけないのは新しい雇用の創出だと思うんです。既成の企業が既得権益をどう守るかということで、それに保護を与えるよりも、政府が取るべき措置はそこで生じた雇用というのがどんどん開いていくということだと思うんですけどね。

二次使用ということでは、映画化するとかドラマ化するとかいったときにはそれまで角川書店や徳間書店がやってきたようなメディアミックスというようなものがあるけども、これにはものすごい莫大なコストがかかっていたわけだ。ところがそれが安いコストでできるようになったわけで、こういう仕事はみんなに開かれますよ。

大中 しかしながら小説っていうジャンルの未来を考えると、それはどうなるんですかね。プロパーの意味での小説、メディアミックスやリッチコンテンツではなくて古典的な近代小説みたいなものは既にないって話ならば……。

島田 無いともいえるし、逆にライトノベルが猖獗しょうけつを極めるといふ現象は起きているわけで、そこで文学の役割というものものは細々とやせ細ってきたけども、これも文化多様性

の一環で保護されるかどうかはわかりませんが、一定数は残るんです。

鈴木 私が覚えているのは、昔コピーっていうのは非常に高く、1枚50円とか100円した。だから大量コピーができなかった。これがどんどん安くなってコピーが普及したわけですよね。デジタル化のいいところは、自分で作品を発表したければ、自分のホームページを作って書きたいことが勝手に書ける。しかもほとんど金がかからずにできる。一種の民主化です。もちろんそれには裏がある。みんながそうなったときにどうなるか。

大中 ネットもそうですけども、非常に大きなインフラがあって、どんどん情報発信するコストは下がるんですけど、先ほどの話のようにみんな紐付きになっていて、文字通り『1984』の世界になって表現の自由を奪われることもあるわけですよね。いわゆる少数の表現とかなくなっていく可能性はあるし、金銭的な裏付けっていうのも怪しい部分はあるわけで、どちらもどっちだと思います。民主化といった場合に微妙だと思うんですよ。発信については民主化であるかもしれないけど、表現者っていうのが少数だということを考えたときには非常に危うい部分があると思うんです。

鈴木 iPadが発売されたときの大騒ぎって、私はよく理解できなかった。電子書籍はまともなのがほとんど出てないのに、そのリーダーだけ売れるっておかしいでしょ。アメリカでKindleが売れたのはわかるんだけども。実際はゲーム機として売っていたんですよね。電子書籍の間

題についてはまだこれからだという気はしますね。

大中 レーザーディスクがすぐになくなったのも生産側の理屈ですよ。どんどんそうやって変えていくことで利益を生むっていう。

鈴木 雑誌編集者に聞いたら、写真家からもらったCD-ROMが1年後に開けないことがあるそうです。一般のDVDでも寿命はせいぜい30年じゃないかといわれているね。

島田 その点フィルムは長い（笑）。

重定 DVDとかはダビングのプロテクトがかかってますけども、10年後20年後に見られなくなったときに消費者が一斉に文句をいうっていうことは想像されますよね。

鈴木 オリジナルが一つじゃ不安な時代になってきたんじゃないかな。こないだYouTubeで尖閣諸島のが出たとき、最初の画像はすぐに削除されたけど、その後みんな沢山コピーして。

島田 あれも強迫的に増殖していったよね。しかし最後の最後に戻ってくるのは人間の記憶かもしれないけど、要するにテクノロジーの進歩に伴ってわれわれの記憶力は衰退していつてるので、どこかにリハビリを入れておかないと。

大中 本すらなかった時代はみんな覚えてたわけですからね。

鈴木 原始的なものが一番後まで残る、ということはある。本だと火事になったら燃えるけど、火事なんてめったにないし。でもUSBメモリーはよくなくすんだよ(笑)。

でもなんといっても、すべてが電子書籍になれば、書齋を抱えて世界のどこにでも行ける。私にはそれがとてもうれしいんだが、楽観的すぎるかしら。